



Title	当事者と〈共に〉研究する？：水俣・仙台での試み
Author(s)	小松原, 織香
Citation	宗教と社会貢献. 2025, 15(2), p. 65-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102821
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

当事者と〈共に〉研究する？

—水俣・仙台での試み—

小松原 織香*
KOMATSUBARA Orika

1. はじめに

東北大学倫理学研究室准教授の小松原織香と申します。実は私は昨年、4月に着任したところです。今は倫理学者を名乗っていますが、私の出発点は性暴力の被害者です。20年以上前のことですが、19歳の時にレイプされました。なので、元はただの当事者で、調査される側でした。インタビューを受けたこともあります。そして、糺余曲折あって今の仕事をしているのですが、当事者から研究者にアイデンティティを変えることになり、そのプロセスにはいろんな葛藤がありました。そのことは、エッセイとして書いて『当事者は嘘をつく』(筑摩書房、2022年)として出版しました。なので、「当事者」ということに、非常に思い入れのある研究者です。

実は先ほど、デレーニ先生のご報告を聞きながら、ちょっと目がうるうるしていました。私自身、性暴力の被害者同士の自助グループの中で、お互いに生き延びる知恵を交換してきました。みんな、被害に遭ったときは「もう、おしまいだ」と思ったし、そのあと長い時間をかけて自分が回復してきても、「みんなが生き延びられたわけじゃない」という想いが襲ってくる。そういう継続的なプロセスの中で見えてくるものを大切にしたいと思っています。

その話は、いま、私が主なフィールドとしている地域・水俣にも言えることです。水俣病という、歴史に残るとんでもないことが起きた。そこから何十年も、水俣という土地は「水俣病」の名前を背負ってきました。私は、その土地に2015年になってノコノコとやってきた、新参者であり「よそ者」です。同時にいま、10年くらい通っていて見えてきたこともある。そういうことを今日は少しだけお話ししようと思います。

* 東北大学大学院文学研究科・准教授

2. 水俣の背負ってきたもの

最初に水俣について簡単にご紹介します。水俣は九州の南の方にあります。熊本と鹿児島の県境のあたりですね。そして、この天草諸島と水俣湾に包まれた内海が不知火海です。ここでは魚介類や藻類が豊かに育っています。天草から移り住んできた漁民たちが、沿岸部で漁業を営んでいました。水俣病の印象から、海側のイメージが強いと思うんですが、陸の方には二股の川が流れ、農村や山林が広がっています。もともとの水俣はこちらが中心で、農業が主な産業でした。

1906 年になると農村だった水俣の激動の歴史が始まります。チッソの創始者である野口遵が水力発電を設置します。その電気を使って肥料を作り始める。そこから、チッソは日本の化学産業を支える大企業へと成長して行きます。小さな水俣の村にチッソがやってきて大きな街になっていく。そのことを地元の人たちは大歓迎していました。田舎が都市になっていくことを喜んでいたのです。

1956 年水俣病患者が公式に確認されます。チッソの工場が垂れ流した排水にメチル水銀が含まれており、それに汚染された魚介類を食べた地域住民が水俣病の被害を受けたのです。そこから十年以上、水俣病の患者さんたちは十分な補償も得られず、劇症性の症状に苦しんで、亡くなっていく方も出ます。貧困と差別の中、なんの助けも得られず暮らしていました。1969 年から 1973 年に水俣病第一次訴訟が起き、チッソの加害責任が確定します。やっと患者に対する十分な補償金が支払われました。そこから、認定制度が設置され、裁判が繰り返され、今に至るまで新潟水俣病と併せて 2998 人が公式に水俣病患者と認定されています。6 万人以上が何らかの症状を認められて補償を受けている状態です。今の水俣市の人口が約 2 万 3 千人ですから、市や県の境を超えて、周辺地域も含めて長期にわたる膨大な被害を出していることがわかります。

さて、来年(2026年)で、水俣病公式確認から 70 周年です。みなさんは、今の水俣を想像できますか？これは私がケータイで撮った写真です。実際に何度も私は水俣の海に行って、泳いだりもしてるんですが、本当にきれいな海です。でも、遠く離れた地域の人たちにとって、水俣は教科書に載った白黒のヘドロの写真のまま、時間が止まっています。

そして、水俣病の患者も劇症性の患者の印象が強いと思います。今、実際に水俣病の訴訟をして闘っている人たちは、いわゆる軽症とされている生存者です。「軽症」というと、たいしたことない被害のように思われるかもしれません、実際に被害を受けている人たちの苦痛は大きいです。例えば味覚障害になると、味がよくわからないので、料理の時に味噌や醤油、砂糖などをたくさん入れます。そうすると、高血圧や腎臓の障害などが出て「生活習慣病ですね」と言われてしまう。でも、その生活習慣を作ったものが、水俣病であったりします。目に見えにくい、わかりにくい公害の被害が今の水俣という地域に広がっています。

こういう状況の街で暮らすのは簡単なことではないです。外から見たら風光明媚な土地です。海が綺麗で温泉があって、みかんが美味しいくて……本当によくある日本の地方都市なんです。でも、水俣病によって多くのものを抱え込む場所になってしまった。水俣病の歴史や教訓を引き継ごうというときに、一番抵抗があるのは実は地元の人たちです。もちろん、記録や記憶を残したいと思っている人もいますが、多くはない。自分たちの地域のネガティブな過去を忘れないといふのは、私は人間の自然な感情だと思っています。

でも、水俣病の患者さんの中には「絶対に忘れてほしくない」と思う人たちもいる。その切実さに触れると、「やっぱり消えていくべきではない歴史なのだ」という想いも抱きます。それで、私が普段、水俣に行って会いにいく人たちは「水俣病の記憶を地域に残そう」という人たちです。でも、その人たち自身も、地元の人たちの苦しさは知っていて、揺れている。そういう葛藤に耳を傾けながら、水俣の複雑さや問題の深さを学んでいった10年だったと思います。

3. 水俣から始めること

さて、調査を10年くらいやっていると「私も何かしたいな」と思うようになりました。そうは言っても、私は長い水俣病運動の中では、新参者のよそ者です。地元の人の葛藤を聴くことはできても、共有することはできないし、当事者ではない。そういう立場で、何ができるのかを考えていました。そこで思いついたのが「貝を拾う会」という企画です。今日はその活

動の報告をしようと思います。

水俣での「貝を拾う会」は、2023年10月28日から29日に2日間かけて実施しました。私が主催なんですが、現地の人たちにも協力してもらいました。東京や京都からの参加者もあり、17名の申し込みがありました。地元の人が飛び入り参加もしてくれたので、20名くらいが実際には現地にいたと思います。

この企画の狙いは自然破壊による「スピリチュアルハーム」に光を当てることです。水俣病というと、身体的被害や経済的保障の話が中心になることが多いのですが、精神的な害、宗教観にかかわる害も起きています。

一番顕著だったのは、不知火海の沿岸部に住む漁民の人たちの自然観です。これについては、宗教社会学者の宗像巖さんが丁寧に調査・分析を行い、『水俣の啓示』上巻（筑摩書房、1983年）で報告しています。漁民の人たちにとって不知火海は生命を育む場でした。人間もまた、海から生まれ、海に還っていくのだという自然観を持っていたのです。だから、不知火海が汚染されて、失われるということは、その感性も失われ、自然観も破壊されるということです。そして、こういう被害は裁判の俎上には絶対に上がってこない。もしかしたら、スピリチュアルハームに対する金銭補償という訴えはできるかもしれないけど、果たしてお金で償えるものなのか。

他方、こういうスピリチュアルハームを理解するのはとても難しいです。私も、文献はいくつも読み、頭では理解していますが、本当の意味でわかっているのかと聞かれると、やっぱりわからない。よそ者にはなかなか手が出しにくい領域でもあります。同時に、これは現代社会を生きる私たちに、とても大切なのではないかとも思います。生きることに迷ったり、つらくなったりしたときに、こちらを救ってくれるような強いパワーになるのではないかと。

同時に、こういう感性や自然観は神秘化されたり、美化されるものもある。対象化して、あれこれと議論することで消費されてしまいます。例えば、石牟礼道子さんは、この水俣の漁民の感性を丁寧に拾って巧く描き出している。でも、それを見て「ああ、いいよね、水俣」と言って抽象化して文学世界に浸って、現実に触れずに終わってしまう。究極的には東京の都市のど真ん中で流麗な議論が展開されて、水俣に関係なく消費されてい

く可能性もある。私はそういうのは嫌だな、と。だとしたら、もっと体験的なアプローチが必要だと思いました。対象化して愛でるんじゃなくて、自分自身が触れにいって振り動かされるような実践を模索しました。

そこで選んだのが「ビナ」という貝です。黒っぽい色で岩に貼り付いています。日本全国の沿岸部でよく見られるとても平凡な貝です。水俣では、ずっと昔から地元の人たちが拾って食べる貝でした。スーパーや魚屋さんには売っていません。だから、地元の人は貴重でもない貝なのでわざわざ話題に上げることも少ないんだけど、よそ者にとっては「ビナって、どんな貝なんだろう？」と興味深い。もちろん、水俣病が発生して海が汚染されていた頃には、ビナを食べることもできませんでした。でも、海の浄化工事が終わり、ビナたちも沿岸に還ってきた。この小さな生き物は水俣病で破壊された生命たちの象徴になるんじゃないかと、私は思いました。



写真1：水俣で「ビナ」と呼ばれている貝（撮影：藤井紘司）

水俣にはたくさんの生き物たちがいます。私はボラが好きで、夕方の海で波間にぱちゅんぱちゅんと飛び跳ねて光っているのを見にいきます。不知火海に沈んでいく夕陽もとても美しい。暮れゆく空を群れになって飛ぶ鳥たちも壮観です。でも、私が選んだのはビナでした。地味で下手すると

岩場で踏まれてしまうような小さな生き物たちを通して、スピリチュアルハームについて考えたかった。私の独特のロマンチズムによって、この生き物を選びました。

実際の貝を拾う会の様子は、雑誌『建築ジャーナル』（2024年7月号）の「〈傷ついた場所〉の風景：水俣病の記憶を継承するために—特集 地域研究「水俣」」で読むことができます。重要なのは、これはあくまでも小規模な実験的な試みだということです。スピリチュアルハームについては、これから長い時間をかけて考えていきたいと思っています。

4. 仙台で始めたこと

さて、先ほど昨年4月に仙台に赴任したとお話ししました。実は「来てしまった」という気持ちがあります。実は私は神戸出身です。1995年、私は12歳で、いわゆる激甚災害地域の周辺の子どもでした。特に神戸と仙台は都市部であり、被災現場の写真は似ているところがあります。それを見ると思い出してしまってつらい。でも、本当は一つ一つの災害現場は違うので「似てる」と感じることも申し訳ない。そういう錯綜した感情に襲われます。なので、「しばらくは東日本大震災は触れないでおこうかな」という想いがありました。自分が傷つくのも嫌だし、変なことを口走って傷つけても嫌だし、という気持ちです。

なので、3年くらいは東北でハイキングして温泉に入って、日本酒でも楽しむか、と思っていました。水俣で学んだことの一つとして、最初から「水俣病」の枠で見てしまうと、実際の地域が見えなくなることでした。だから、「震災の東北」で見ないほうがいい、まずは東北を好きになろうと思っていました。楽しく暮らしていれば、見えてくるものもあるだろう、と。

でも自分の研究テーマで、震災のことをやらないという選択肢がないのもわかっていました。そして、赴任直後に災害人文学のチームに入ることになって「もうダメだね、逃げられない」と思いました。しかも、環境学部の栗田大樹先生（材料工学）に誘われて、正面から震災を取り上げたプロジェクトをすることになりました。こうなったら、腹をくくるしかないですね。

栗田先生とやっているのは「JINSEI プロジェクト」です。これは「人生」と「韌性」を引っ掛けたダブルミーニングの名前です。栗田先生は、地元の手漉き和紙工房の職人・塚原英男さんと共同して、新しい環境負荷の小さな材料を開発しています。それがあんまり知られていないので、作家やアーティストと一緒に宣伝方法を考えていこうというプロジェクトです。実際には、すごくのんびりしたプロジェクトで和紙工房のある地域のフィールドワークをしたり、紙漉き体験をしながら「何ができるのか」を探っています。

塚原さんは元は荒浜の福祉施設で障害を持つ人に紙漉きを教えるインストラクターをしていました。東日本大震災で、施設が被災します。施設に残った紙漉き道具を譲ってもらい、独立して今は川崎町の笹谷というところで工房を構えています。紙漉きのためのコウゾという植物を育て、皮を剥き、紙を漉いています。笹谷は冬は雪で閉ざされてしまうので、そうなると紙は漉けません。気候に合わせた製作を続けています。

こういう紙漉きの職人さんと、最先端の科学者が一緒になって新しい素材を作っているというのは、とても大事な取り組みのように思います。でもそれを、ストレートに言葉で伝えるんじやなくて、小説やアート作品で感性に訴える形で、価値を共有していくのが目標です。といつても、まだ具体的にどうしていくのかはよく見えない、暗中模索のプロジェクトではあります。やっぱり、このプロジェクトの基盤には、自分の水俣での経験があるんじゃないかな、とは思いますね。

今日は、まだ進行中の小さな実験的な取り組みを紹介しました。これからどうなっていくのか未知数ですが、面白い結果になるよう、頑張って行きたいと思っています。